



伊勢參宮名所圖會卷之四

目錄

宮川	御牧小姓	堤古	清野井庭社	山田	離宮院舊高松	豊川	北御門社	子良館	御酒殿	後園山社
清盛堤	鸚鵡石	大間園生社	中嶋	願離山浄寺	月讀宮	御勢棚	園足社	忌火屋殿	御調倉	度會園足社
御川祭	土真嶋	大間廣	久留山威勝寺	心法寺	高川原社	北御門橋	徐宜宿鉾	本紫垣	御番倉	御厩
後波里	中川原	草薙社	下總寺長壽寺 日蓮三節乾港墓	三寶寺	館所	丸林	北鳥居	廳舎	上御井社	清盛捕

一鳥居 ツノのとりか
 直會院 玉串所 同リ林
 手水場 中池
 五百枝松 いへ
 齋王候殿 玉串所
 度會宮心殿 相殿 三座
 沖饌殿 たらの
 高宮岩窟怪異 たらの
 山神社 山
 多枝松 た
 豐宮崎 希
 伊賀利神社 伊
 神樂 神
 別宮遙拜所 別
 三鳥居 三
 玉串所門 番垣門 玉
 西宝殿 西
 内宮遙拜所 内
 下御井社 下
 高倉山 高
 井谷池 井
 綿河内 綿
 三石 三
 沖母神拜所 沖
 幣帛殿 幣
 高宮 高
 風宮 風
 岩戸 岩
 日文庫 日
 沖田 沖
 世義寺 世
 小田橋 小
 尾部社 尾
 青雲院 青
 大五輪 大
 王孫池 王
 皇女森 皇
 楠部村 楠
 園 園
 津長社 津
 林橋文庫 林
 鏡石 鏡

山末 山
 瀧浪山 瀧
 河邊里 河
 隱山 隱
 光明寺 光
 經ヶ峯 經
 貝吹山 貝
 月讀修験道宮地 月
 月讀森 月
 牛谷浦田 牛
 西乃谷神照寺 西
 鼓ヶ岳 鼓
 橋姫祠 橋
 麻留山 麻
 園中里 園
 妙見町 妙
 尾上山 尾
 間之山 間
 中地苑 中
 善提山大神宮寺 善
 伊賀利神社 伊
 蓮臺寺 蓮
 宇治橋 宇
 宮傍氏社 宮
 繼橋 繼
 岡寄宮 岡
 常明寺 常
 古市 古
 葛籠石 葛
 興玉森 興
 慶光院 慶
 不動堂 不
 長明寺 長
 五十鈴川 五十
 世義寺 世
 小田橋 小
 尾部社 尾
 青雲院 青
 大五輪 大
 王孫池 王
 皇女森 皇
 楠部村 楠
 園 園
 津長社 津
 林橋文庫 林
 鏡石 鏡



宮川東岸
豊宮川

風雅集

君が代の

ちねと

これと

宮川乃

君が

杖の

色も

かりん

後京極

所名

宮川

山田の入口に是より一名度會川 豐宮川 母宮川 禁川と云

皇原已が淵也其非谷より瀉て二見大湊と云

小懸地 西へ宮川東風ふけばう一所の川又あまふらん

源一里を登りて宮川の淵に水は濁るを物一氣清人を源と云

源遷宮の所付も再移成くる是上を源宮勅使未向の時の例と云

御新向の付寄り後せりたり又大晦日豫宜の大技も寄り勅使と法團より系清人

此川又流しき身を流むるもこれ其なり

新拾遺 源宮ありてより宮川のゆづり永無までもかけ多敷まん 定家

源後と云宮川の巻浪の敷より若瓜院への於る郡 朝勝

○清盛堤 宮川の堤をつつていへ川原にありて元正天皇靈龜法和貞親の以て

大凡洪水せりし記録又久より崇徳院大治三年勅して大宮三層及

大河内神社志登英神社を河水の守護と祀らせ給ふけ河平清盛令を

多りて此堤を築つと 又弘治三年秋末なる洪水ありて

○御川祭 毎年八月三日是と法座奉記又渡相河原又天忍徳海人との人

年一魚をとりて神饌又蓄ふとあり今も其末の持守氏の人給筆

を記す多魚取の式あり 其詞云

所名

藤波里

宮川やまの初水のたつみを岩にけりて後浪の里 法眼能因

或記云 是宮川ちうた沢地村のやまの初水のたつみを岩にけりて後浪の里

宮洞宮波波の尾を流あり其不流のたつみを岩にけりて後浪の里

内宮洞波波の尾を流あり 後浪の里と云

幾子代を松よりけりて後浪の里なるもまを經ぬらん 長真

と云せり後波波の尾を流ありての後浪の里なるもまを經ぬらん

ありて荒涼と云 右勢陽雜記

御牧小野 源宮と云小野の初水を生じ松系と云て後浪

或記曰 此名を後浪と云る者も一也中は老より一也此のついで後浪の里の川も

宮川のやまの初水のたつみを岩にけりて後浪の里なるもまを經ぬらん

付りぬる岩の里のついで後浪の里なるもまを經ぬらん

岩出里 宮川の上の初水を生じ松系と云て後浪

宮川の上の初水を生じ松系と云て後浪

鷲鷲石 宮川の上の初水を生じ松系と云て後浪

もあけ不西の大板谷野尻河津瀬川より流さるり東の初水を生じ松系と云て後浪

所名

鷲鷲石

宮川の上の初水を生じ松系と云て後浪

宮川の上の初水を生じ松系と云て後浪

宮川の上の初水を生じ松系と云て後浪

宮川の上の初水を生じ松系と云て後浪

宮川の上の初水を生じ松系と云て後浪

宮川の上の初水を生じ松系と云て後浪

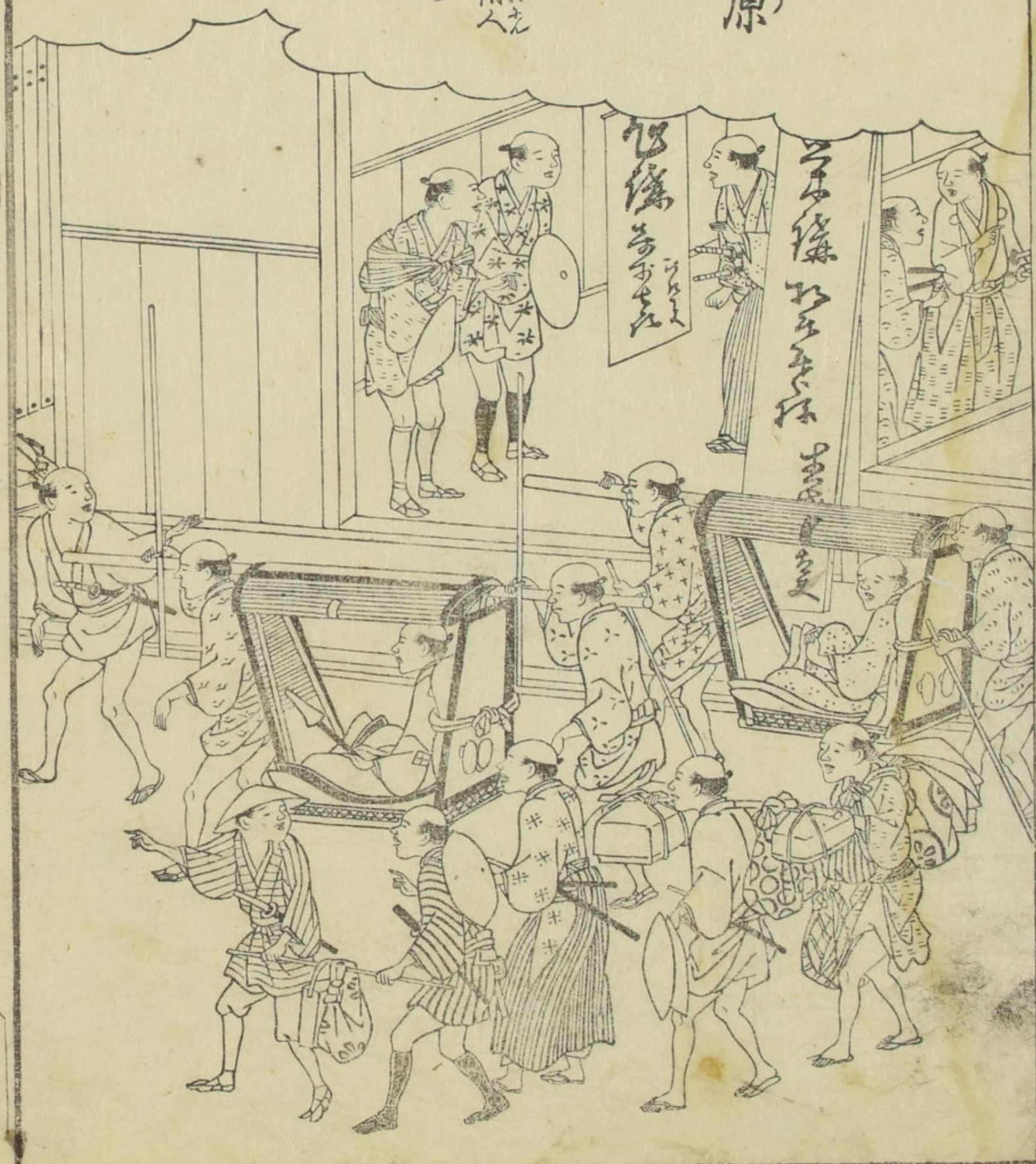
宮川の上の初水を生じ松系と云て後浪

宮川の上の初水を生じ松系と云て後浪

宮川の上の初水を生じ松系と云て後浪

中川原

諸國の系清人を
河師より
人を出し
運入
其河師
の名溝
の名
組隊の



帳名紙
書一
此の家の
毎に招牌
を出し
お竹葦
のこ



所名

落合此より約野へ三里勢踏石まをるとして八里とせむと落難石に
 して去の一日も蓄み及べり但し船にて往來とれば其旁はこまけに
 急流なれば志よく絶素つんとは別して約が野より上と
 巖峰就中中村の南麓見坂とすふふの勝景うて松崎に方と
 其南に嵯阿藤とて村邑敷ありてたまた往來繁く山田の
 市中へ魚舟の出るも昼夜不絶の中より魚鱈も多しとて又同
 然れども思ふに石のまは後々恒たす其のこ十余ふせよとて其の
 の音も石中に抱めく言ふる言ふく此等石を舟傳播や度くわて東東長
 義御の言ふより詩記を成院の觀後入時靈元帝畫師ふ中宗仙う修せ
 屏風とせし其記を去付りて云東涯 隨筆
 ○漢名を考書なるといは彼國ありてちをべつとて
 道は破部村より石ありてをよまをくわ
 首は橋より柏瓜さげ柏流しの注りて風宮に
 約る七月に日風日祈の注りてま○柏の邊に流る
 柏のまをくわとての長柏さげをむむら
 寂阿

中川原 宮川の勢あり人衆列たり此東北方なる向村の内之和名およむ名を回とせり
 書寫の邊りこは町の西宮川の上より回九日の邊りあり是を中流にともは破部村上流

土貢

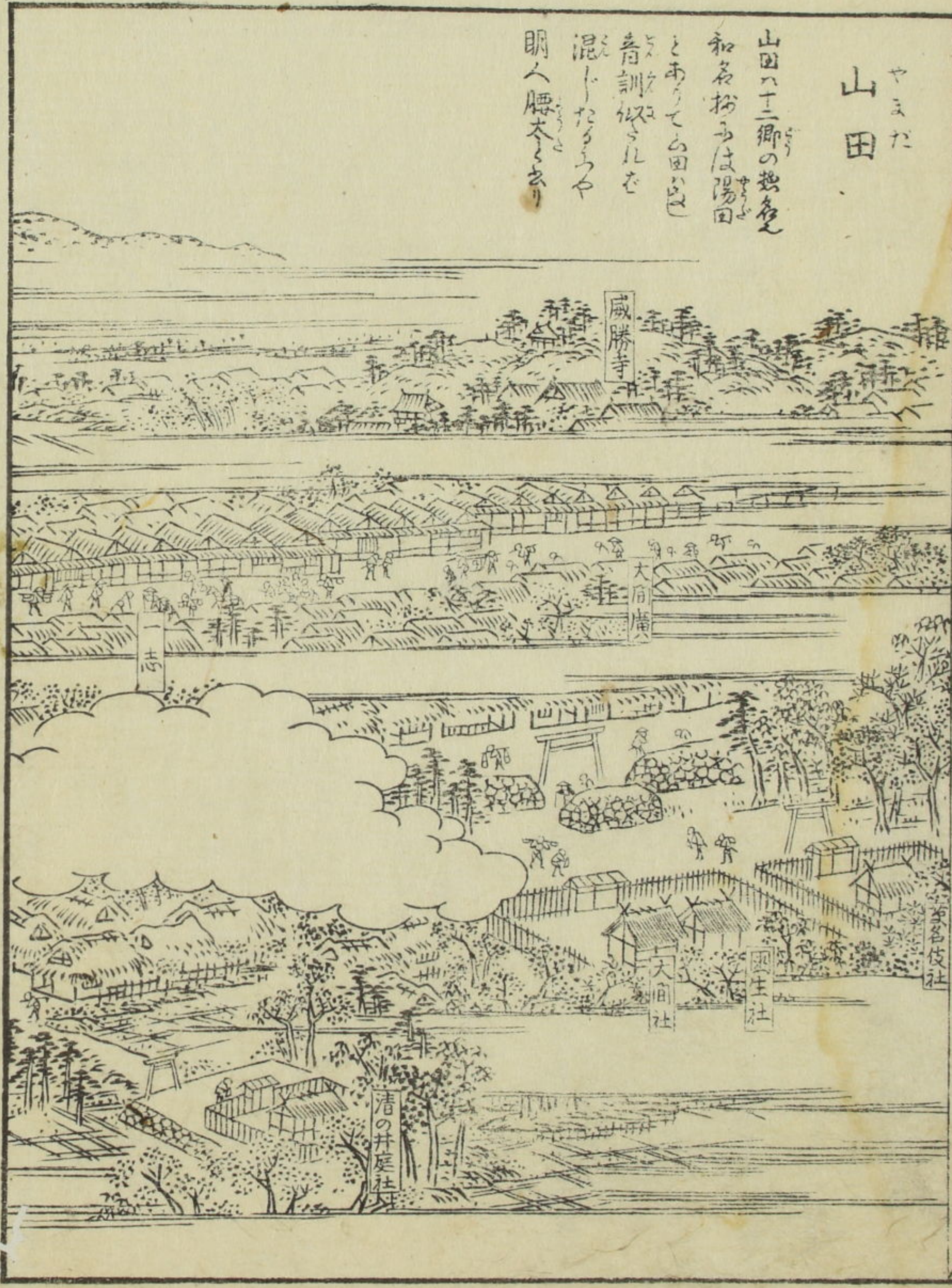
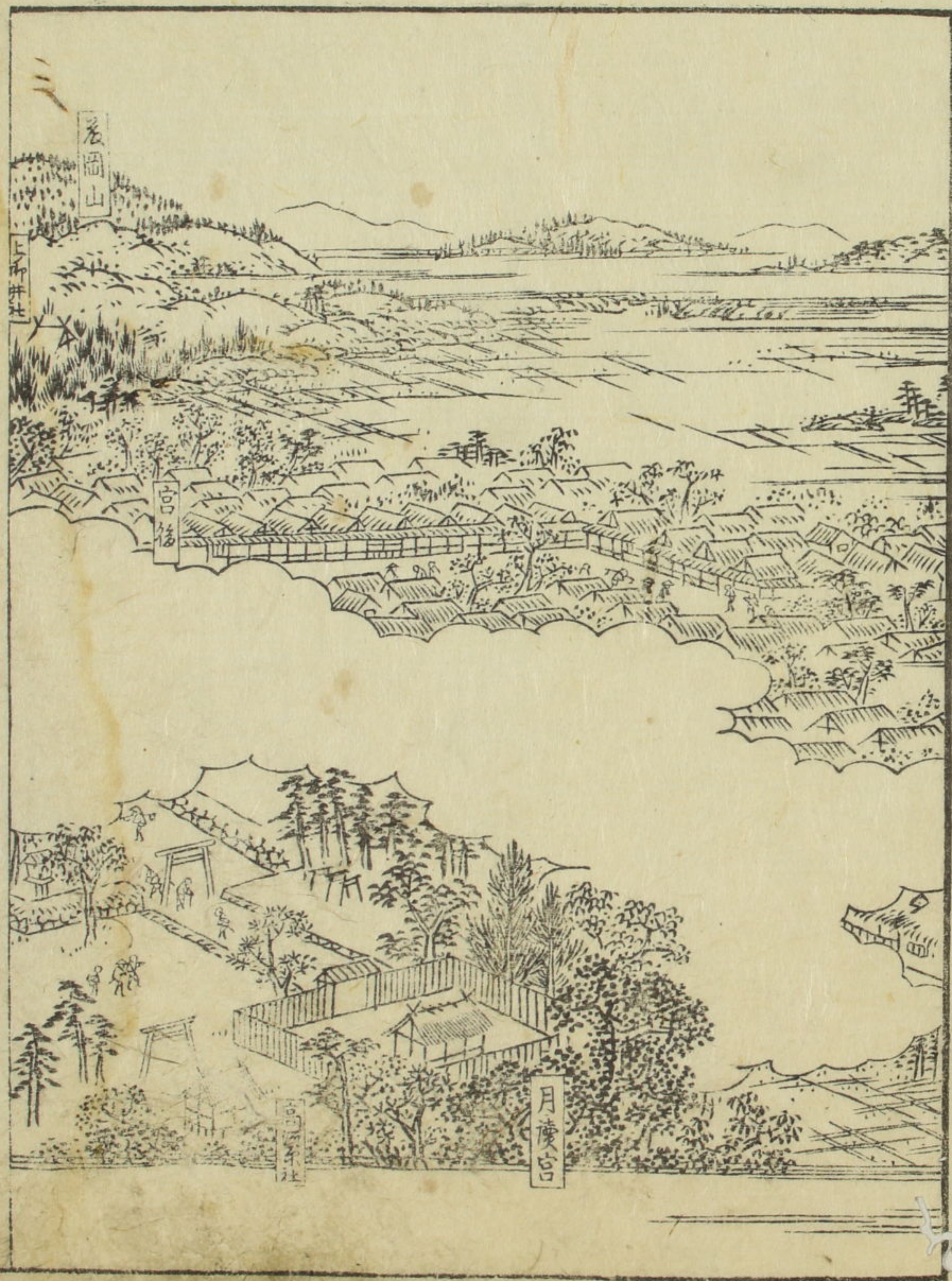
俗に橋より柏瓜さげ柏流しの注りて風宮に約る七月に日風日祈の注りてま○柏の邊に流る
 柏のまをくわとての長柏さげをむむら

堤 中川の邊り中川の川中なり
 附言 非郊にて撰る中流をせ右とすみ分ての法下馬の橋とす西より日本後六層のせ右
 の古名ありし所のや此石の者難見みありく朝鮮へ吹流されたりが彼地より古々の
 老母へ傳へありてと牽とる其表名又日本後六層のせ右母と記せり是と日本より古々の
 りのよりしと世古とすり勢見山田の方言わたりてをさくすつかりとて西川見見
 翁が法法とすりヤカタラ文又の康親が率徒婆の記しとて古々の孝信のありとて

大間生神社 大間の西の西あり社標は誠と山城ありし附在仁天皇の御代大君
 大間生神社 大間の西の西あり社標は誠と山城ありし附在仁天皇の御代大君
 大間生神社 大間の西の西あり社標は誠と山城ありし附在仁天皇の御代大君

大間廣 上中川の流下堤せ右の入口ありて
草井神社 大間の中川の西あり社標は誠と山城ありし附在仁天皇の御代大君
 草井神社 大間の中川の西あり社標は誠と山城ありし附在仁天皇の御代大君

清野母庭社 大間の東の東あり社標は誠と山城ありし附在仁天皇の御代大君
 清野母庭社 大間の東の東あり社標は誠と山城ありし附在仁天皇の御代大君



山田

山田の二郷の地を
和名抄には陽田
とありて山田は
音訓似たりを
混したるや
明人腰本より

中徳 塔きり系剛のり入田口のりか介左の撰る中左系へ出るる南の塔のり小左系の流

久留山威勝寺 山田上の久留山 真言宗に本尊不動明王を祀りたるの塔の

六葉師堂の信の著の著作と云河あり林泉の経系

○昔久留山威勝寺のり遠き寺あり其のり後再建より今の寺のり大

○此寺の上のり山田のり其の上のり別所寺のり其のり山田のり

○下総寺長秀同孫三郎頼澄墓 中徳所表通寺の内あり

○山田 山田のり山田のり山田のり山田のり

厭離山浄寺 誠坂 浄土宗因光大師弘法のる場あり

正法寺 二侯あり本尊観音 藤海家 徳田村九の社

三寶寺 山田の中三寶寺より二町西なる不動明王言宗より寺号のり

離宮院菴趾 官人等を檢外して来々の料を充て置るるなり

○離宮院 坐中臣氏社四座 麻呂武雷命 香取齋主命 平國天照屋根命

携幡千々姫今稱するなり春日明神あり

月讀宮 宮後水の塔 不奈月夜見命 荒魂命 二坐也 外宮三別宮の内あり

子細内宮月讀の奉(年)と

高河原社 一名河原社 園生社 月讀宮塔の内東の方あり 外宮撰社

館岡 上中下あり月讀の宮より外宮へ至れ此館岡あり

九条宮乃の小御門とのを居との二乃を居とのを居より系備と

奉式とと館岡の内みれのはありて是山田の志申はく諸方へのり

西里のり 大政大臣 後宇多院

所名

四ノ六

山田

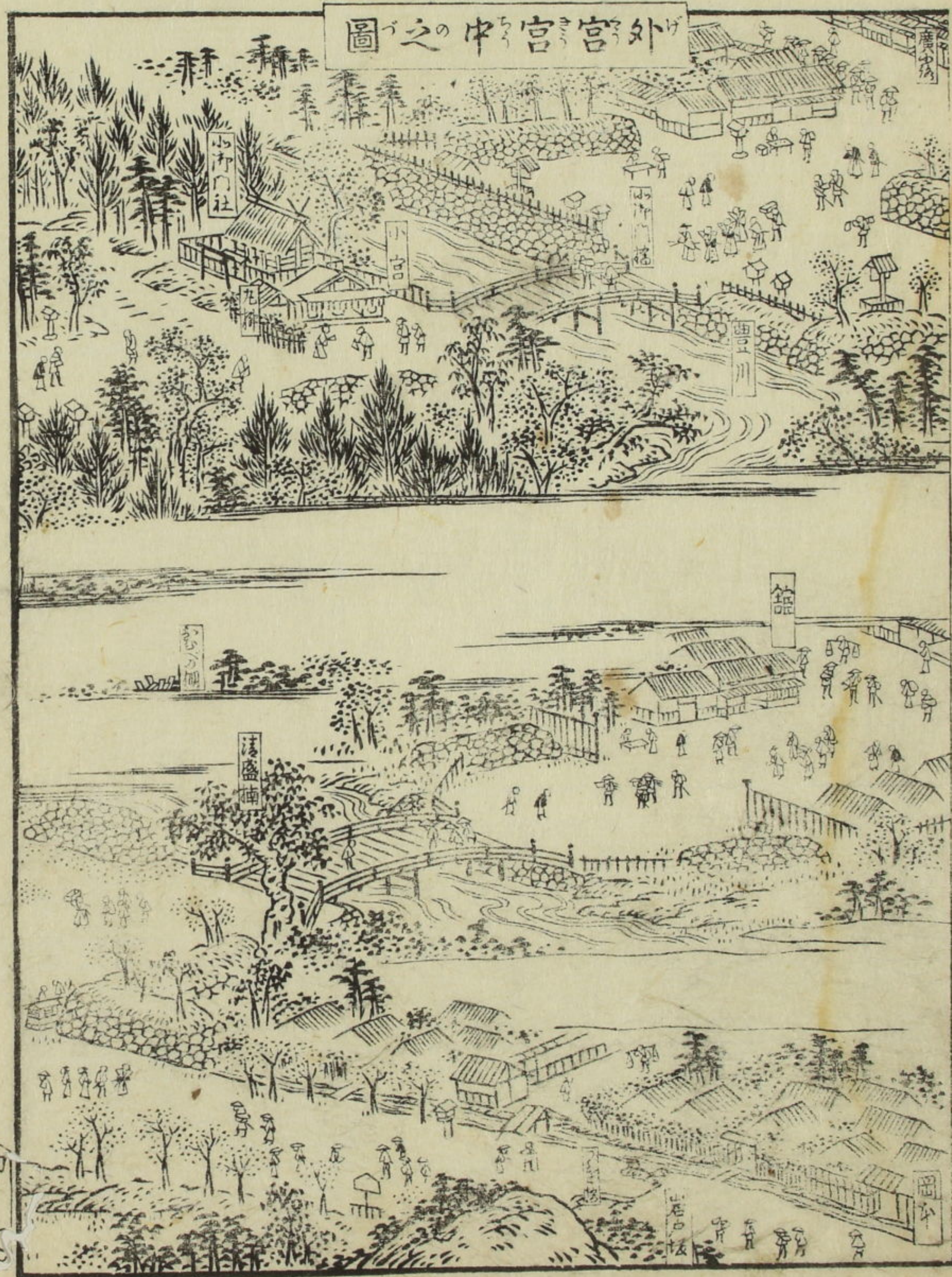
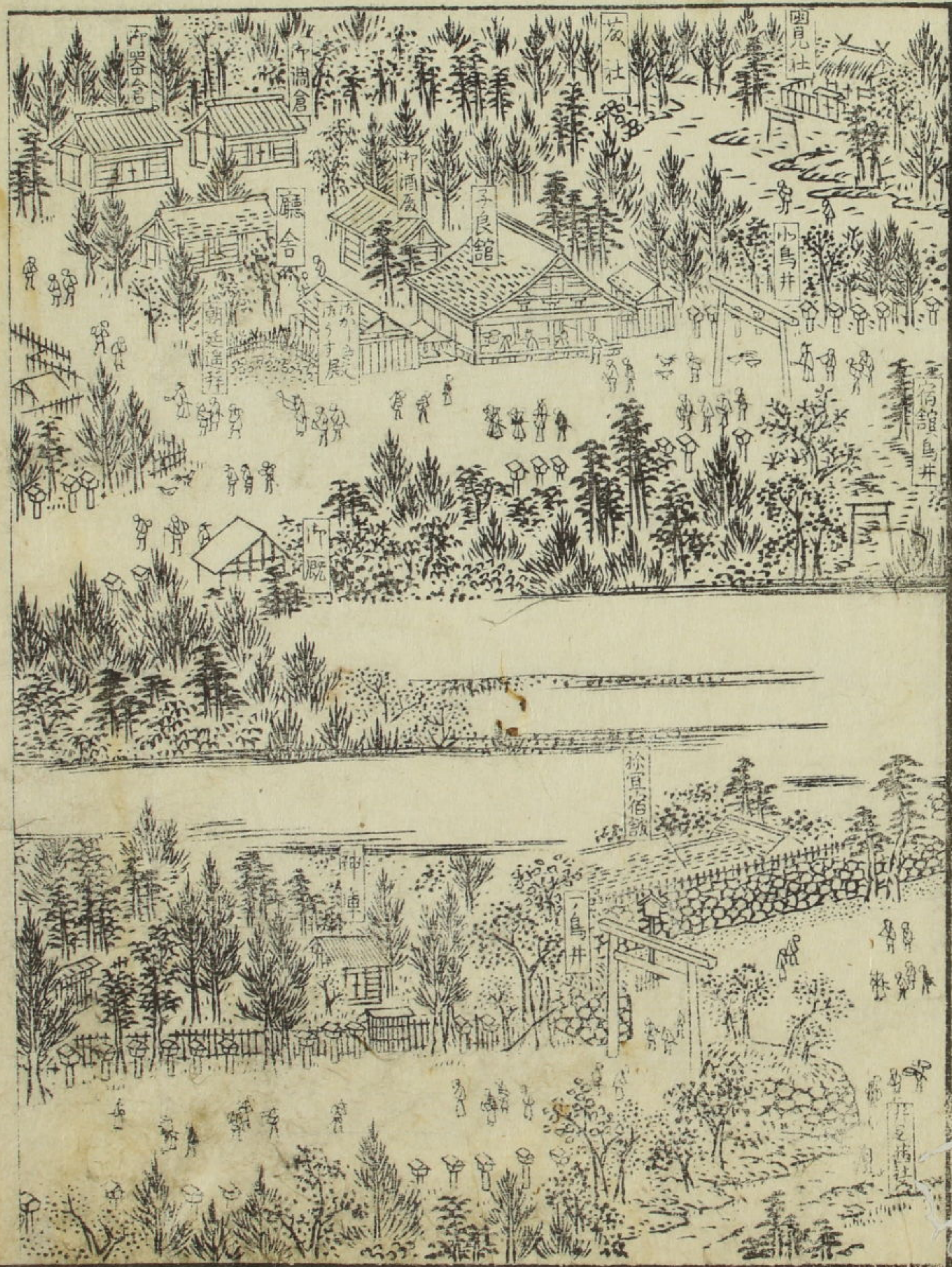
山田

山田

山田

山田

山田





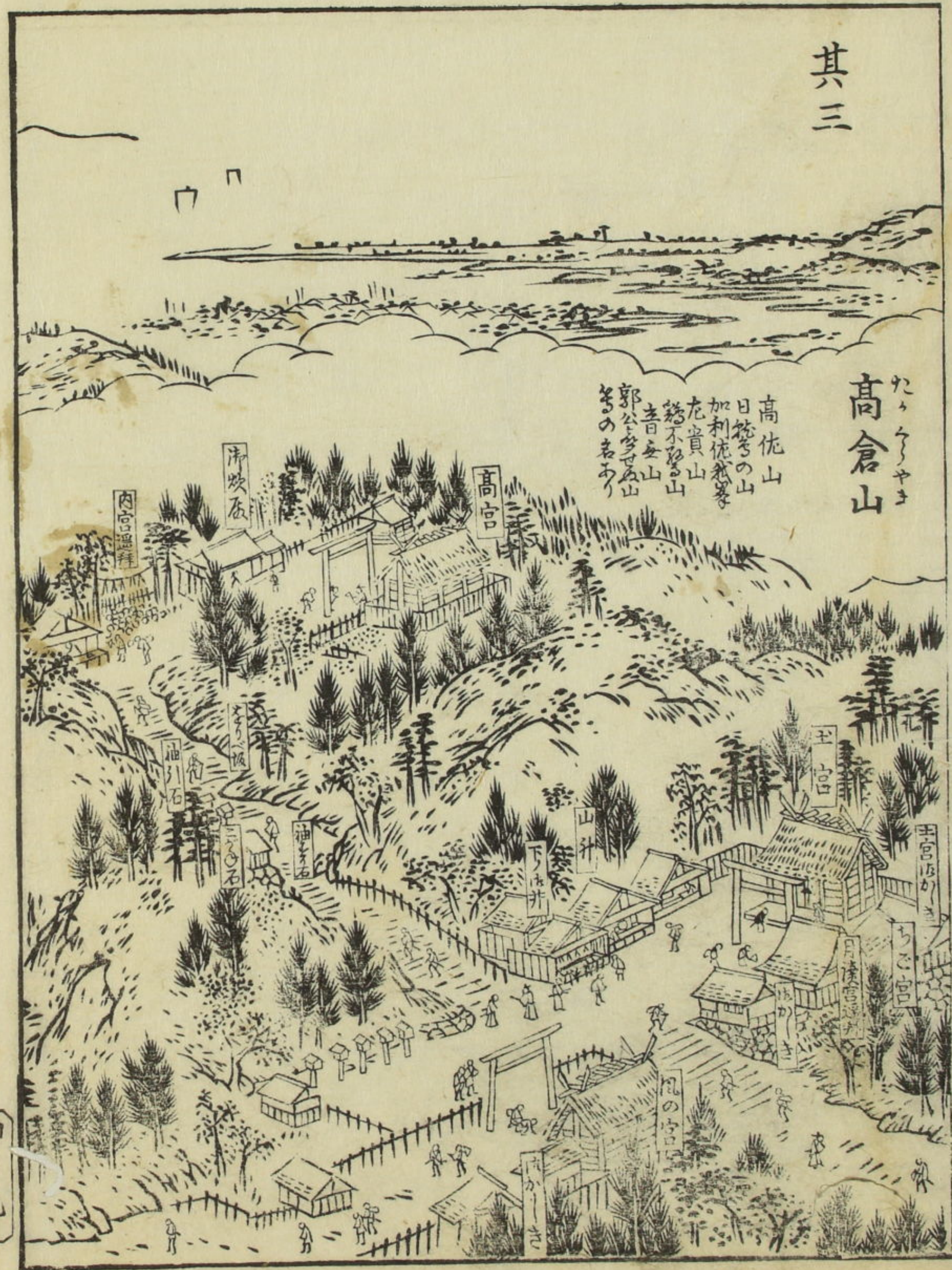
其二

天の御参宮
 持統帝聖武
 帝後白川
 室町屋御参宮
 旧記云々一信長公未吉公
 よりはくく大樹の御来徳



正殿

正殿
 石表
 玉串所
 西所遊拜
 五木殿
 木社巡終



里殺炭津のくろくろの宮をわたり忌服者獄人の微細を捕らざる制あり
此の通り 昔此の通り 無き人希かりし時若村松平後を多しとせし

豊川 宮の西より 豊川の宮より 豊川の宮より 豊川の宮より

にあり一の名井口を在りあり小御門橋の遠を廣くし

小御門の橋の西より石垣を長し十余間あり八尺斗幅六尺あり

又長安の軌と於御門も教多あり是上古の御厨御園の類也

御執貝棚 小御門の東に隣郷より軌とる魚多野菜類とけぬみは置り

又長安の軌と於御門も教多あり是上古の御厨御園の類也

御執貝棚 小御門の東に隣郷より軌とる魚多野菜類とけぬみは置り

又長安の軌と於御門も教多あり是上古の御厨御園の類也

御執貝棚 小御門の東に隣郷より軌とる魚多野菜類とけぬみは置り

禪師

自是
外宮
宮

北御門橋を川に架さる橋なり豊川のくろくろの宮より

弓矢刀槍の兵具佛舍利佛經等を奉りて入る瓜楨制と

九柳 小宮の東にあり小宮を一の宮といふ九柳の社ゆゑ九柳といふ宮中の

北御門社 小宮の西にあり小宮を一の宮といふ九柳の社ゆゑ九柳といふ宮中の

園見社 小御門社の北にあり小宮を一の宮といふ九柳の社ゆゑ九柳といふ宮中の

御宜宿館 小宮の南にあり小宮を一の宮といふ九柳の社ゆゑ九柳といふ宮中の

園家の御祈禱をせしむる所なり

社に唯く是本の名の居たり

北鳥居 小宮の南にあり小宮を一の宮といふ九柳の社ゆゑ九柳といふ宮中の

より入るべきを便よけれは是れ入り

子良館 子良といふ名の御館なり

度會社の人を多しとせし

毎日常来新宮宮にあり



清盛捕

昔小松内大臣清盛
 勅使として素向の
 冠をさきまへて
 西へまへて枝を
 伐らせしむる
 これを里俗あや
 まりて清盛捕と
 つかふべし
 勅使として清盛
 三度重宝の二を
 素向のしゆ
 勅使が御文
 見入る



神庫一の名居と二の名居 古典記録多々納心寛文中の御遷宮のとき再

真と昔の足尾源で文殿として講習校勘の石達量よりを史記を以てて今の宿館より

苗の社蘇くたてり其後をまゝに 二名居居九り一入あり定ありて不名居

二鳥居一の名居の 勅使の御此ありて大麻御座を献下拂の枝本綿を

繕ひ登りて振をりひ又堅垣を去置又盛て拂の系よのせと振瀧

て清めたり諸國の系宮人又御師の命に清めの御法

直會院五太殿二宮九太殿一宮の三殿を一つにして重倉殿とあり又五太殿一宮と

公より再興其の勅使御食座の不也 神饌をなすは神饌のおもものとして

をもつたり日本 紀伊統天皇の紀よの嘗の空取らうらへと訓し神饌御食を

會とらうらゐの御せん御酒まつりあり春日社及び重倉殿ありて勅使御食を

つゞき孫ふちり其後御座の御もまは三流と申す殿にも 今も神嘗祭あり

御座も用いて御よりて其名のりありありと申す也 今も神嘗祭あり

此一殿よる孫ふて御食座ありたり御興者とも不其西は区が今の終り

玉串所九太殿の系大を瓜首の石壺あり神饌御食あり 雨天に御興者に

終りを今一の殿にて地ありて是月次神嘗祭より孫宜宮司

玉串を孫孫に玉串終りありて○廻拂此不也其拂の下に

宮司玉串を孫拂の系廻り孫宜の玉串を取く拂の西を也る

に廻拂とて御座の御宮司孫宜の冠はけと本綿をくを此拂に

かゝり此不其場不度きゆ人太座とて

別宮遙拜所廻り拂の傍御池 別宮に所あり 月讀宮高宮去宮風宮之

石壺あり西の系宮司東の孫宜の石壺あり

三石御池の 石壺鼎の如く三ツ居並系宮の御星を避く不踏をわひと

星月次神嘗祭より遷宮の御出巫内人御襖を修とる也

御池御池の 上中下の御池あり上の御池と中の御池と下の御池と

二の名居の外之室あり中の御池と三池とも云又河川池とも云又宮

式河川池の神ありとありて此不也 此の池は御池より東に殿の御池あり

多氏寅三月三日御監外宮を建て遷宮ありて 〇比丘尼池 徳時比丘尼の御

池とありて構の御池とありて御池とあり 〇比丘尼池 徳時比丘尼の御

池とありて長安御池とありて御池とあり 〇比丘尼池 徳時比丘尼の御

池とありて長安御池とありて御池とあり 〇比丘尼池 徳時比丘尼の御

手洗場 神池の傍にあり素の殿裏附の石盤より其御裁り成りしり

○中堤 此堤より風の宮儀と云ふ承正記に神池の古橋の乃とありて云り
修持儀修持冊二尊拜所 二尊およりび遠

方に坐と社社の遙拜不之 ○神母神拜所の拜不とて奉宮人又修りあり

僧尼拜所 三のも居の系流のの持所 僧尼の佛法神人此及びひく拜し奉る

○五百枝板 ありしり今いふ
○五百枝板 ありしり今いふ

神風や五百枝の雲をまきそて板乃志の少くは又々 度會 元長

三鳥居 三鳥居とは俗稱之荒垣神門とも板垣神門とも云

第一神門 右記の外に玉垣神門とも云 ありしり是を十二石神門とも云

第二神門 右記の外に玉垣神門とも云 ありしり是を十二石神門とも云

石壺 左右あり 東に勅使宮司西に十真の祿宜の石壺之石壺と云ふ

娘候殿ありて是れ其母王玉串を奉養娘候殿ありて奉養せし

兩殿とも終てさるるを元祿年中再真ありて是れの時雨玉

勅使宮司宣命祝詞を此殿より讀なり終ふ例あり

玉串神門 一名内の玉垣神門とも云 諸祭其宮司祿宜の持所玉

串を物忌より取りて此神門の柱の下に納るよりい名付あり

神風や玉の紫をとりかき内外の宮に奉とこそいふ

蕃垣神門 是を後段の神門とも云 櫓板の上におり奉を丸彫り

是の康治大嘗會の中居斎庭と奏せしり

所名



神嘗祭

兼例幣使

天子より西宮へ勅使をねて
 幣幣とまへせ給ふ九月十六日
 十七日にて年毎のちるまに
 是と例幣使とふ此の
 朱萱院の河内より
 始り十日葱華より
 河内へかゝるくま
 神祇官へ祈奉
 ありて終ひ給ふ

み奉九月
 十日

殿丈九

祭五

玉串内人

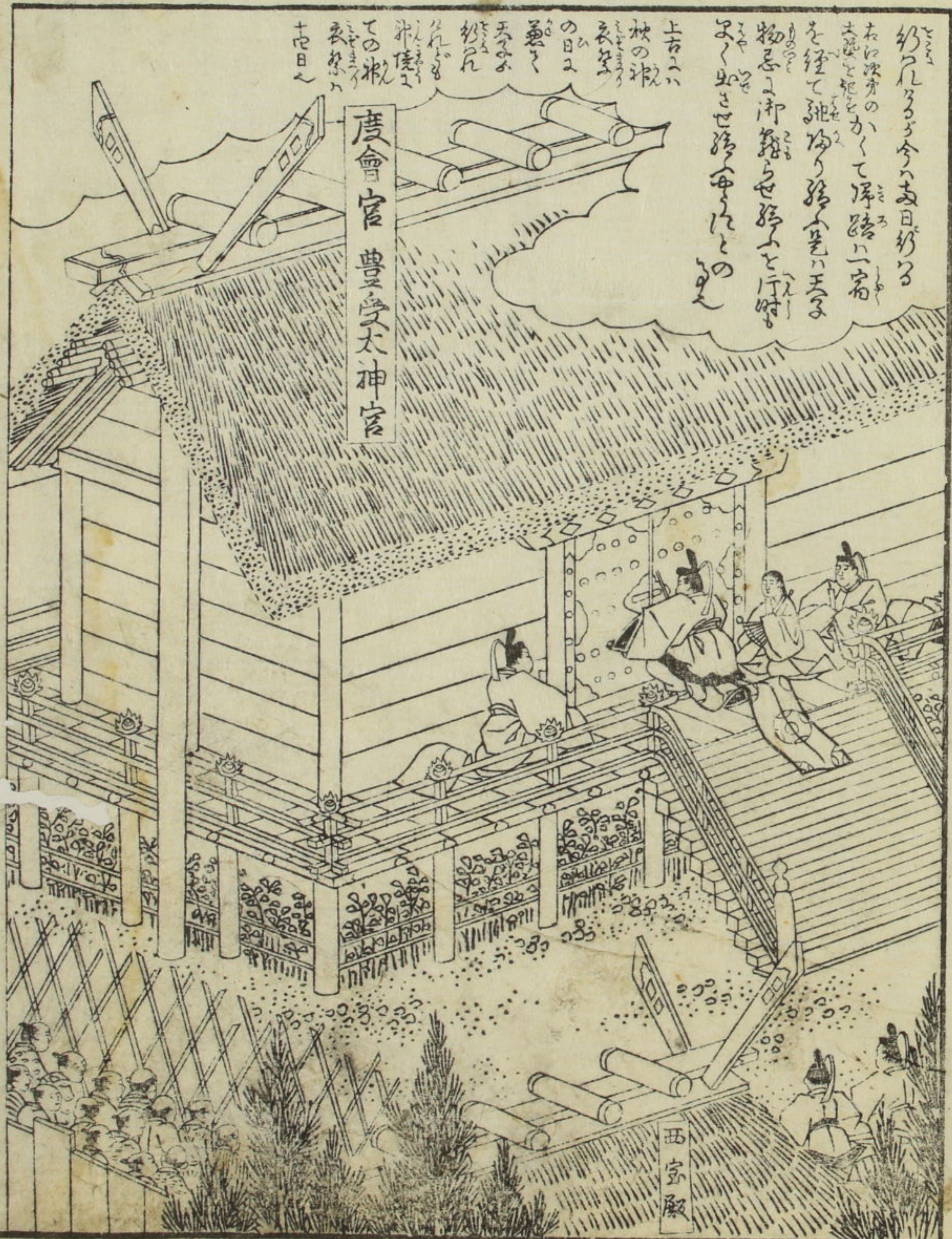
其二

勅使進發のちの宣命とてあはして作被伯
禁庭のま務進日幼んをその日よあつて
宸筆の宣命と揚て常もなる長月の神嘗
の御都ぞは中居候やて奉進と勅とあつて
巻垣の周を城(結決)の濃く宮門と海を
掃くの調物と整へのもあつて下馬物列
あはして御馬を引ま中居宣命とせは
皆持をの拂と玉串御門の服(一)ある
次は御儀をえりて御石
まゝ一途直正殿の標と用
て御幣神室の始あつて
勅使を奉り進ん
震多の宣命と浸候
儀と柄ひまう候退て
外宮の直會殿に付
沖酒供養の載と此
御食應りて深と深
或は御儀の首のあつて
まゝ一途



幼んはつて今もあつて
おのれはかいて深踏(一)高
を徑て進み候人其の天
物忌(一)御幣を給ふと行時
又(一)如き深(一)入候との
まゝ

度會官豊受太神宮



上宮の
秋の御
長衣
の目
天の
松尾
の御
長衣
十日

所名

瑞垣御門瑞垣御門の内なり 瑞垣ありけ名あり瑞垣御門の内にあり

度會宮正殿 豊受皇古神 一座

相殿 天彦々火瓊々杵尊 天古玉命 天兒屋根命 三座

棟後拾遺 俊成

社人よりいふ古神の義を記すも深秘とのと著し因ら坂土佛系流記と見れば外宮祠官長史後三位家範卿の教示よ云相殿は皇孫尊を始免尊と稱す天兒屋根命 古玉命 三柱ままと天兒屋根ままと云ふ由社と宗廟社稷の神はヤククをいふゆゑ其末の不審をひらきたりぬ皇孫の尊より天照古神の御子天孫德耳尊携幡千々姫を娶と生せ給ひ御子之素戔鳴尊の御孫諸御孫の御譲を得て我朝の御ありたり坐したるが國去を皇孫尊と譲りて御子の出雲國小御垂跡あり今社大社是之云 社是之云 社曰豊受の豊は豊饒ゆたの氏にして俗に豊年といひて萬物の生植稗

早の患さく又日の月十日の雨其耐を不冬ゆを云云 受といふ穀をけり先と云く地ぬける物の無き受のま書しウケルケケの訓を借するのたて受の字ふも田島の巡見毛の飯櫃をケケと云ふなり されば此御神の地の豊饒を守り給ふ故に豊受大御宮といやなり又先を唐にけり社稷の神と云云 此はよけれ明白なまじもあはれおの宗廟といひ相殿の御孫を記してのふはけり去りたれと云ふ宗廟天下の大廟なり由人又宗廟社稷と出たり相殿此より其大廟社稷の御子と相殿は御子と云ふことなり之の御子と云ふは尚内宮の事なりと云ふべし

○當宮御社殿の始り人皇廿二代雄略天皇廿二年九月十五日是日垂仁天皇御宇廿六年十月又天照皇古神當國平鈴川上鎮座 兩宮より御子と云ふの御子二宮 後に百八十二歳を経て天照皇古神の御託宣より丹波國の國に御子と云ふの御子二宮 其首倭姫命天孫を御孫と云ふの御子と云ふの御子二宮 謝郡美名原より移せまします 其首倭姫命天孫を御孫と云ふの御子と云ふの御子二宮 天孫御子と云ふの御子二宮 易と聞くと云ふの御子二宮

○皇孫尊の事 土傳日記 天兒屋根命 中臣系系神 天古玉命 天孫系系神 兩神補佐の神

御殿造りには南面ありて萱葺堀立垣に六石穴燈居るの後神く

家作りを是へ竹本氏其ま繼ぐげにせり云々○風博舞本今農家

ある鳥掛くしる本舞本にして本竹本の幸末成きくして用ひ一形之舞舞玉皇の侍内
の圃ちくを上り舞本成上りして御祭ありて是を瓜焼んとすやちやちや記日記に於て
此舞を其制禁ありし今も風はすれ本竹本氏に傳へて本竹本氏に傳へて本竹本氏に傳へて
本竹本氏に傳へて本竹本氏に傳へて本竹本氏に傳へて本竹本氏に傳へて本竹本氏に傳へて
本竹本氏に傳へて本竹本氏に傳へて本竹本氏に傳へて本竹本氏に傳へて本竹本氏に傳へて
本竹本氏に傳へて本竹本氏に傳へて本竹本氏に傳へて本竹本氏に傳へて本竹本氏に傳へて

東宝殿隅の角にあり○西宝殿西にあり東宝殿東にあり御幣御後御調の至氏

納り西宝殿より御神馬の調度名納り御宝鏡也

幣帛殿外幣殿ともいふ御調の方あり東宝殿の幣帛と始り東海を以て

裏御門正殿の右にあり熱て御門より何よりを石窓神櫛石

窓神二神を祭る是を御門神と云延喜式櫛石窓神四面門各一神を石窓神

御饌殿正殿の良方あり是二神を御饌神々の御饌を侍り御殿あり

御饌殿正殿の外にあり是二神を御饌神々の御饌を侍り御殿あり

八月廿二日のあけをとりまけて若くは御饌神々の御饌を侍り御殿あり

四十束社正殿の右にあり俗に外宮に十束社内宮に八十束社と云り日記

に云き御饌神々の御饌を侍り御殿あり

一守須野神社正殿の右にあり二草素波神社正殿の右にあり

四國見神社正殿の右にあり六大河内神社正殿の右にあり

七田上大水社正殿の右にあり八志登義神社正殿の右にあり

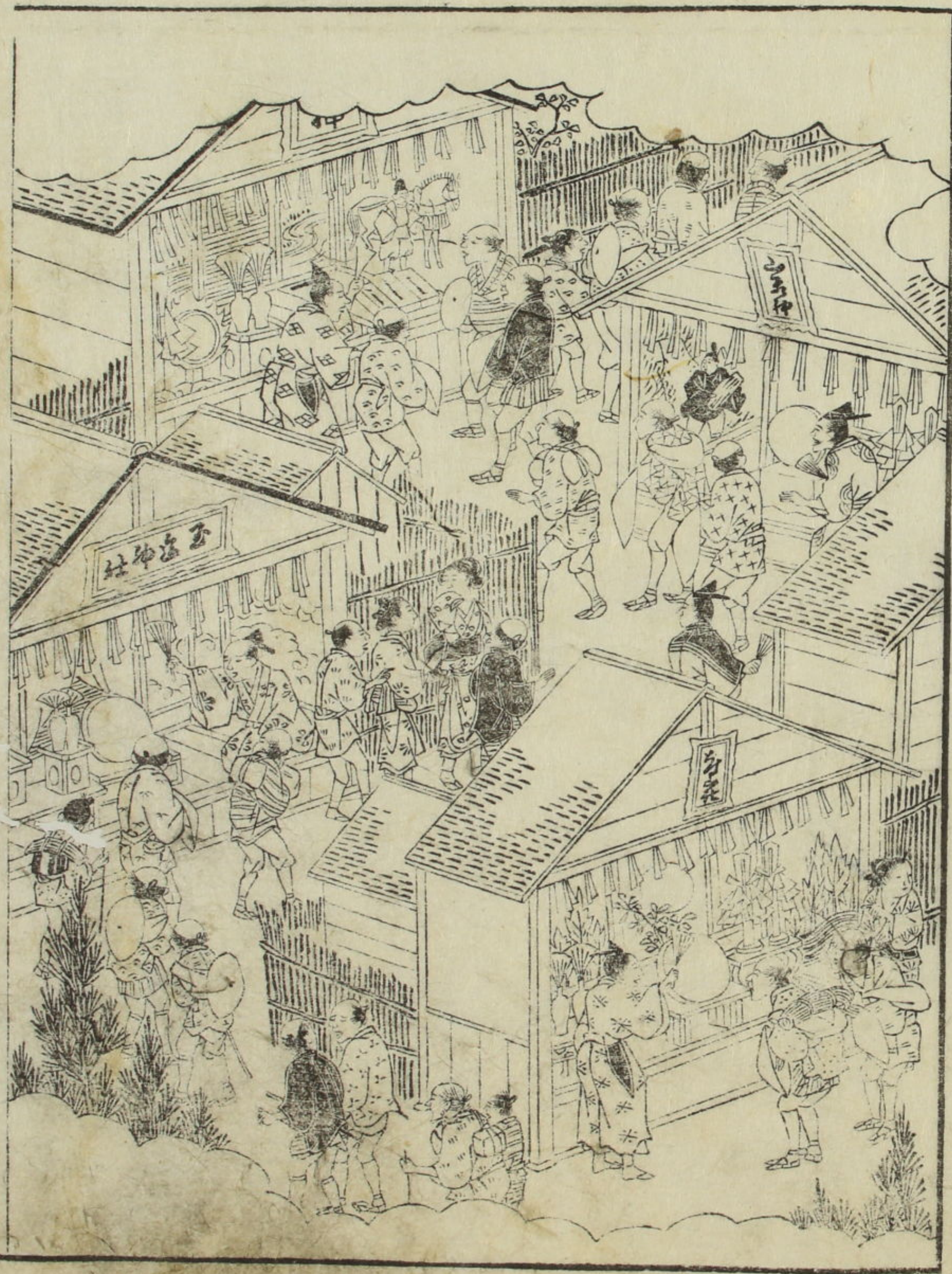
井庭神社正殿の右にあり十高河原社正殿の右にあり

十一河原淵神社正殿の右にあり

日郡大間圃生社の事あり

或は号河原圃生

其曲之曲村あり



末社順拜

昔ハ勢乃及多瓦那
 度會耶又を御
 座と括社末社と
 悉く順拜せし
 抱かれども好酒
 日敷を用あつの旁と
 其遙拜不と
 並り



十二川原大社 不承川水神月讀の宮の東に
 十三小俣神社 不承金輪惠命
 十四御
 御食神社 不承保食神武日御食
 十五宮崎氏社 不承大村雲命彦命氏社神之祭由帛
 殿乾角より武命氏遠祖也
 十六小御門社 不承若雷神云云疑くハ武日御
 電社社々小御門を川内より
 十七上御門社 不承天叢雲命
 式命日御
 園山の禁禁
 十八下御門社 不承水神之河母の別宮云云
 宮神饌飲水所之
 十九修
 蕪神社 不承若雷神多氣郡
 二十河田口神社 不承居不
 未洋式命
 二十一根倉神社 不承宮中
 郡根倉村
 廿二佐那神社 不承志呂官祿命多氣
 郡佐那村
 廿三須麻田賣神社 不承未洋
 村
 廿四修加利神社 不承修加利姫命按るは母老姫
 水神白雲別女
 廿五野依
 川田神社 不承未承
 志上國
 廿七極懸神社 不承未承
 廿八
 櫛田社 不承若子命
 多氣郡櫛田村
 廿九雷社 不承未承
 廿一箕曲氏神社 不承未承洋箕曲氏
 社神々五不承洋
 廿二山末神社 不承山末
 山末大山神姫命後孫
 小和子命武式國神
 廿三鹽屋社
 廿四容神社 不承大己貴命子武命
 廿五高神社 不承日別命
 御日建日丹方命
 武命日建日丹方命
 池上山より神々若根
 廿六佐々良比賣社 不承日建
 武命日建日丹方命
 廿七大國玉社 不承大國玉命
 武命日建日丹方命
 二坐呼
 廿八宇須野社 不承向々向村
 二國谷

所名

高宮 大宮の南
 のとよりあり 衆神二座 修験戸主神豊受大社の荒鬼之外宮身一の別宮
 ありて増垣玉垣もろろ今に於て増垣一重
 井邊雑話より云々系傳記云大宮のより池をるる多々あり
 下御門 不承宮 神饒廣博記云 於檜尾織部坂とあり坂又檜尾とも云
 名長
 岩窟も芥の音とせぬとに准り人の坂ありと云
 この宮へより池の東北石橋を渡り風の宮との間を抄れ境
 一榎方殿より後へ坂を歩ゆは中又御門を極支ありて口修
 八部社とて坂の中程石階をきあり是の聖徳太子御神室の神饒神牙
 もを納り強り終る秘密の所と云 神指石神引石といひて人の踏る石
 わり或ハ二ツとも三ツとも云 神指石は修験より修験へて修験十二下より修
 目四の赤赤や小方りと修験神を益神の修験にあり 武法を修験長を修験にあり
 金石 修験神を修験にあり 修験保の修験にあり 其は宮中の路上
 修補せし時修験殿の後より二ツの奇石を得り長廿二尺許幅八九寸重と

高宮岩窟の怪異

傳曰高宮のしらの山は十八の岩窟あり法神
窟は聚て伝書つひよきうるとつひ修へうその神
秘のつらとたましく證空窟はた洗とれが
今と人のつらと受て石面のつらうかるるも
又よのつらぬぬるはあふたもあ
又作うしの星とてあふたはとととて
真飲のつらと路し路しのつらとつ
路しつらと神目をたのはしつらと
里入つらと石面のつらとととと
つらとつらとつらとつらとつらと
あふたつらとつらとつらとつらと
あふたとつらとつらとつらとつらと
たつらとつらとつらとつらとつらと
加どうらとつらとつらとつらと
武陵一日の道とおほつらと
又漢あつらとつらとつらと



かれの道士法術をひて
さとの岩窟窟をさう
あつらとつらとつらとつらと
あつらとつらとつらとつらと
あつらとつらとつらとつらと
あつらとつらとつらとつらと



常々倍せり小石なりておてい令の音ありこれより真命長官神

庫又納む 後日本紀汲難ヲ記し皇武帝天皇其多淡奥より始めて皇命を奉獻す則倭

内宮遥拜所 此所にして内宮及び別宮を拜しきるなり

土宮 元りの方より 系神三座 大土御祖神 宇賀御魂神 古回令 神宮外宮

第一の別宮又坐と 崇徳院の天治三年彦倉川の尾守護のわい宮宇賀御魂神ありて

炊殿 炊殿とよは日ト 地護宮 土宮の外宮にありて三座の地護の神ありて

月讀宮遥拜所 土宮より右後町より上よりあり 月讀宮御炊殿 口右東

山神社 月讀の宮遥拜 系神大山御祖神と神祇次第記よりあり

下河津社 社神の社の神 末社の下河津記と上の神子取後ありて此河津を月也

外宮并に別宮 系神三座 級長津彦命 級長戸造命 級長と級長は通ひ

外宮并に別宮 系神三座 級長津彦命 級長戸造命 級長と級長は通ひ

中宮

凡日新 毎季七月に月日新神の御名を流して其凶を

山田原 外宮河津産而して一とも洗み河津殿の辺也

千枝枝 凡宮の東晴 菅大宮目 千枝とて人極らとて一とも此之是ハ又百枝

對一枝多とて千枝也 菅大宮目 千枝とて人極らとて一とも此之是ハ又百枝

高倉山 岩戸のやま 上より 又も佐ととも日新ととも

若代川 濁りもありとも 又も佐ととも日新ととも

岩戸 岩戸のやま 上より 又も佐ととも日新ととも

高天原 岩戸のやま 上より 又も佐ととも日新ととも

高天原 岩戸のやま 上より 又も佐ととも日新ととも

高天原 岩戸のやま 上より 又も佐ととも日新ととも

高天原 岩戸のやま 上より 又も佐ととも日新ととも

高天原 岩戸のやま 上より 又も佐ととも日新ととも

高天原 岩戸のやま 上より 又も佐ととも日新ととも

高天原 岩戸のやま 上より 又も佐ととも日新ととも

高天原 岩戸のやま 上より 又も佐ととも日新ととも

外宮御山
豊宮崎



豊宮崎の山

御田植神奉

御田の神奉り又月夜日とあり
大物忌の日子良此田より
稲種をうつる其の神と
非泉後人あつたり
秋祭をなと長安の興
其外祠安馬
田の上のつた物
田長十人あつ
深帯たつたを
うけ丸の
秋祭
あ





其二

権り一人全との権瓜う

其河云権ううてけく河田
 其がとらふくまうん選ん
 廟指入 河田廟とひてたてた
 言素泡鳥欄まつとも権老
 の人にくわ自形と権人まう
 され奉崇ううてま権瓜う
 権味を右の老人のおう権廟
 をおて其崇とふと戴と長官
 の或十員の中 系典 系河皮の系
 うう馬の尻とふのそにせうか
 て権崇とてうくこふと長
 宅と躍りゆふち
 其うう林のうてふくけとて
 其とやされよこふとかな
 こそ此宅はくく廟と其ゆ
 けは廟法布と名は権の庄有か
 うく斗の地まも権抄のま
 〇田秋利秘よりうけ権と外宮
 権宮の内宮は九月十六日外宮
 九月十八日は新米を権
 せうとてと新骨舎とふ



高社社 ○宮社社 高社社は高社社の名に社よりして不惑なり 此二社東

西に並 は坂をりて園中へは坂の下は乃より宮傍にも少くは此坂をこせ坂若戸

豊宮傍 宮心方の東にあり又西にあり 又此坂は神河内にも神小川

宮傍の大海岸にも少くは引遠て其間の回細く細流おまへり

宮傍文庫 宮傍にあり 慶安元年に宮建あり其外宮祠官等の学校

講習討論の寮也 東西八間南三間あり南面より九つ渡浪の右る金山

揚ぐ九千部に及 揚ぐ九千部に及 揚ぐ九千部に及

又他國素性の人とて其器をそとに講師とて文庫人教ふ

厚志あり人の講師も 德衆も 林道春春秋傳一部之時顯

文庫書記之文あり 長文なること 此外同氏春秋紀及永田若

欽亭等の記もあり 又外の額に三宅若菜道慶の弟之内の額に曼珠院

宮御等 宮御等 宮御等

陽成院の御宸翰 陽成院の御宸翰 陽成院の御宸翰

屋上様 屋上様 屋上様

度會大國玉比賣神社 度會大國玉比賣神社 度會大國玉比賣神社

外宮横社十六座の内 外宮横社十六座の内 外宮横社十六座の内

伊加利社 伊加利社 伊加利社

井谷池 井谷池 井谷池

握木林 握木林 握木林

豊宮傍 豊宮傍 豊宮傍

所名

豊宮傍 神河内

井谷池 握木林

伊加利社

外宮横社十六座の内

度會大國玉比賣神社

屋上様

陽成院の御宸翰

宮御等

欽亭等の記もあり

文庫書記之文あり

厚志あり人の講師も

揚ぐ九千部に及

宮傍文庫

宮傍の大海岸

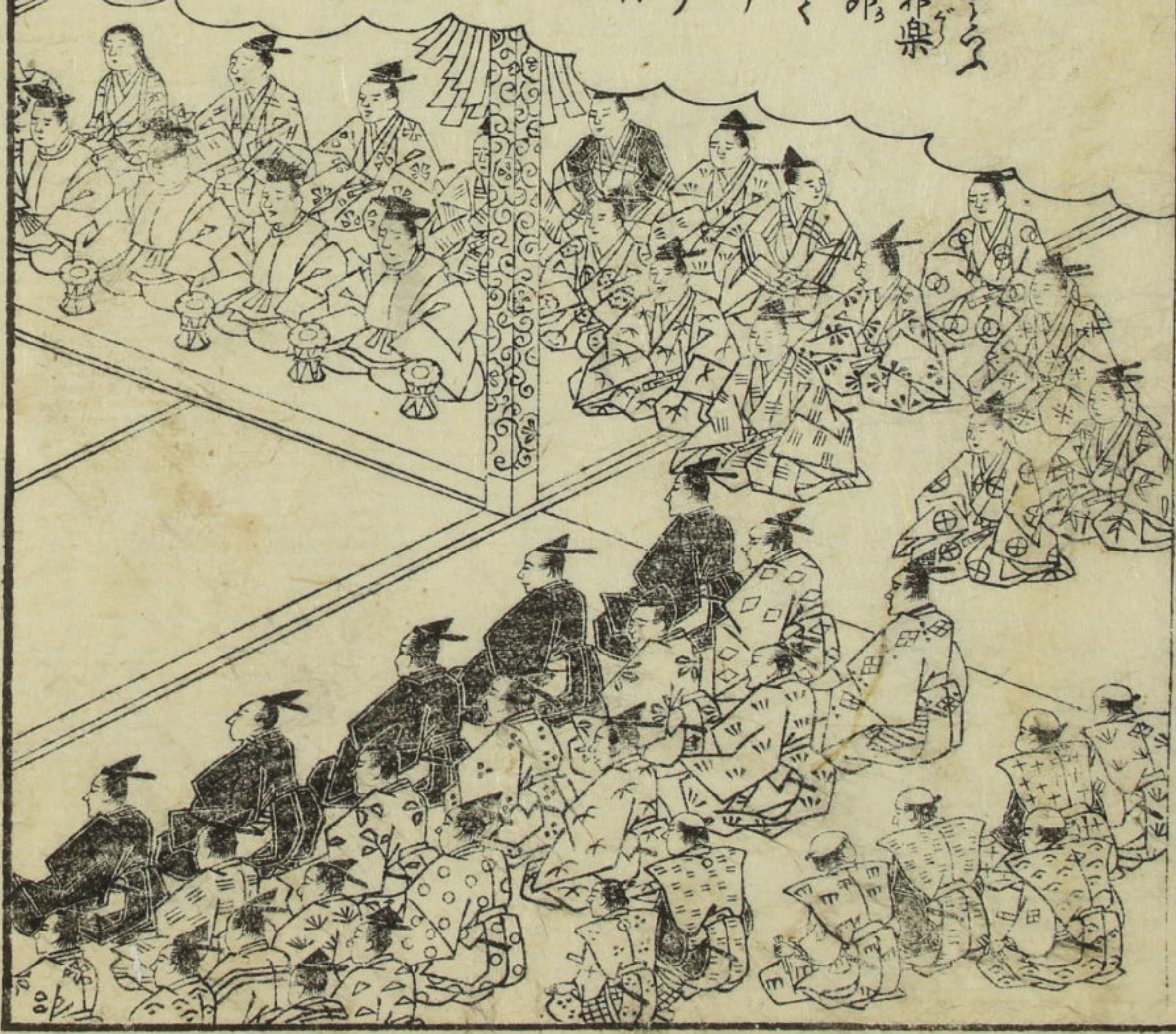
豊宮傍

西に並

高社社

神樂

他の神社の如く神楽を舞う神樂といふ
 舞はし神師の宅に神樂と構へ神樂
 後人を招待して勤むは神樂舞の形
 曾て知るまふは其式面官の形
 旧記に云ふやうに終に後拾遺
 伎に云ふやうに其末の天の宮
 又神樂といふは其状は
 舞ひに似ての如くや内侍の
 神樂と稱せしむるなり
 今世も武承平の化は舞へ舞へ
 石をの神樂と稱しむる神樂音
 を振へし人懐をわい酒潤の神樂
 ようのいさくんと云ふなり
 又神樂の父母の赤子をもちま
 ちく愛思得まはさしむ
 めらと云ふみちあり



林の中の神樂
 里神樂の如くとい
 神樂といふ
 今これをおく



錦河内 岩が傍と云ふ宮傍のまきをかり源の懸を掛りおきま倉ふりの落合より懸か田川

河田 岩戸の 果を宮傍の河田と云ふ後穂の河田とも穂進回とも云元長

の系譜記より河田神田あり其名元天の長田といひて天の神田

極と云ふより河田常供殿と云ふ豊受天神の河田之尚國上と記と

安谷山 河田の耐推の本一本と切小屋を造りけりおいて十真の御直りあり

山末 井足の本本相谷と云ふ此社の名元俗に根あり松と云ふ

麻留山 藤が森の南と云ふその形 田上大水社 各社社の本と云ふ田上の社元倉に門の

宮傍の氏社 氏社村と有 系社元會に門 祖天村雲命之此社の本と云ふ小祠六社

あり度會氏の祖をたかりたるあり 延賢神主曰天村雲命より天日別

世義寺 教王山室金剛院神宮寺 此寺の別号は山伏寺 旧は茶山龜のくも

不のありを承録六多外宮の西より移り 寛文十年今の地と移せり

所名

関基志と云ふ本名の茶師如來今も例歳九月廿五日より廿日の間如法經とて
書寫勅符あり 中真の海と云ふ後方よりとて毎月もまれば着の御もたけ論論勅
○どうび 興の如きりのを昇るに後を被とてや 芭をちりて寺傍の云云意覚大師と始り
うるといふ言樂綴花の首の送法と云ふ此經を書寫とて後後後年を忌む世に其形
其水にあり汲ぎらぬ用ひて紙を洗ひ茶葉を洗ひ由敷の式と云ふ後後年を忌む世に其形
茶葉を洗ひ三筋と云ふ後後年を忌む世に其形
或は後後年を忌む世に其形
密ニツ掘出せり一ツは長寛元年一ツは治承二年とあり寺の什物として今もありけ法會
瀧浪山 此寺の 林葉と移あり 瀧浪の橋と云ふ
瀧浪のふじよと云ふ麻の音と履をさひ一き園本のさき 荒木田 成言

所名

○白子園 此寺の門前を云ふ 寺院五の字あり瀧浪の橋の東より八幡山安文山

所名

園本里 此町東の小田橋 先年河奉勢より岩戸坂を切ひらうとて外宮の一

所名

を居より内宮往來の由と云ふと云ふの寛永十七年九月のふまふまの

所名

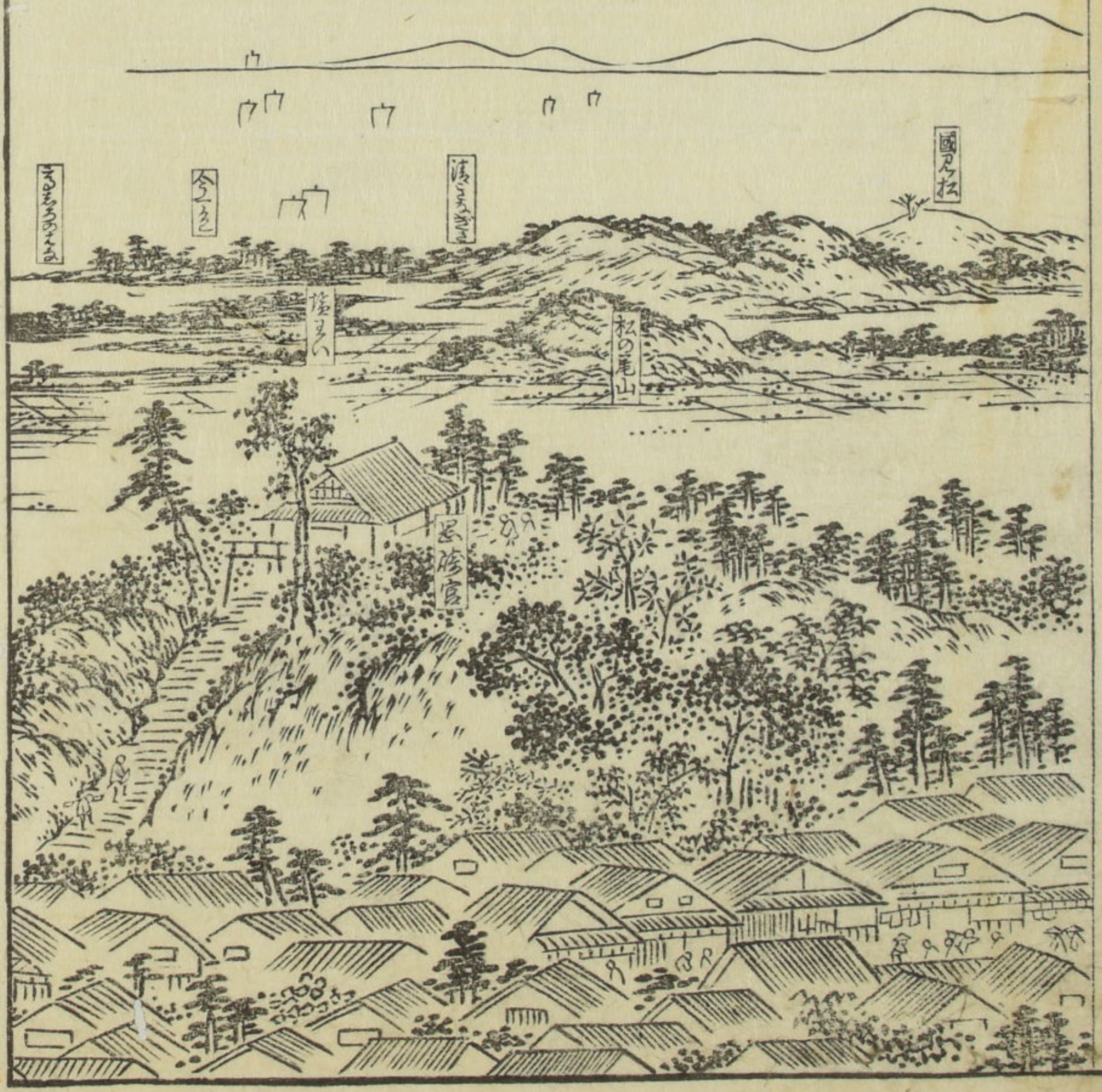
一のを居より少狐に下馬の橋を造り岩淵と云ふ園本里と云ふ途と出



妙見山 永代の眺

附 白土まの幸

神宮古記 曰貞觀二年
 大内人高至度命の
 敷を此園の社
 新られ二月十日十
 五日内胎二人の男と
 産む宗雄を雄と号
 く同三年十一月十八日
 又日二人を産む春海
 並と号く同日午土月
 十日日又産む冬御
 春産らる此六る六
 と云ふか此ま産む
 と交りて今此の
 末は白土まと稱す
 此れなりと



此の白土氏管業
 入も入るるを
 淡の記のま田
 糸部の信
 入るる



隱池 尾部故より南の山の上より 隠池と云ふ恒ちうりともいふに 此池の泉

未だありあらずに弘法勝刺の不勤あり早魁の附け不勤なり此の泉なるなり

所名

尾上山 古名隠園と云ふ倭姫命薨去の地なるに之を集及び代々の

撰集又詠歌多し寛文多中尾上社として倭姫命社再建あり

一が又破却今誰建と云ふもたう社存せり 墓地ありしや寛文の改

者ありはげし引引し罵辱しめて退放し或は改葬せしと云ふは石の地獄谷

常明寺 院あり 高日山法宗 常明寺 院あり 高日山法宗

陽成院 御宸翰 本寺 希山 門木 魏と云う聖徳太子の建立ともいふ

○神萱遺社 院あり 常明寺 院あり 高日山法宗

と云ふ祭礼 正月八日 夜度之外宮の末社なる夜度會社に神樂男た勤之

其式異例之其日長官方へ僧僧へ箱二俵を送り又男女陰形の餅を拵

たり興信よりさき者之を拾ひ男も女子も深のちりしと云ふ終り

て又神樂あり ○岩窟 之を倭姫命の石隠の窟といふは寺の山門の西の

此辺の地名然て阿多母といふ泉寺といふ名あり

頼政碑 末の者の 眠地藏 石眼目

神穀山光明寺 昔新と云ふありて天台宗なり

聖武天皇建三つと云う開基未詳

結城上野入道忠墓 院あり 高日山法宗



常明院

本堂天井より古田兼好の
樂書あり

出生死沙入涅槃

專念旨趣大樂大

財常能堅固

古田真禪山下
野僧一七日参籠

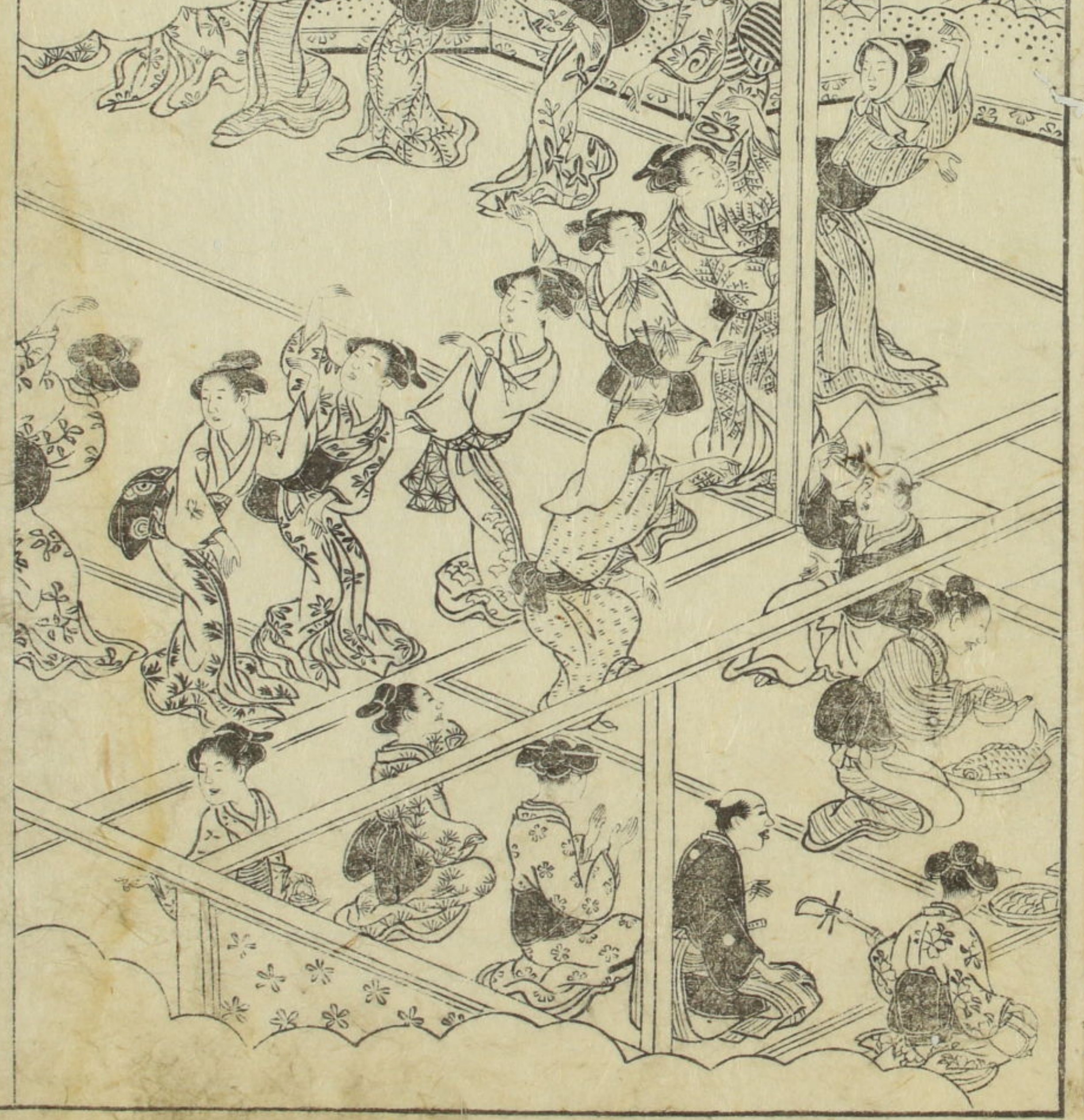


古市

都の市場今法園
三日市日市八日市
さといひて其日とき
うく市をさせし名の
ゆりうり市は近國
を御の商人の集り
不ちうんが其市と
さけ不ぬ花女ありて
核人の馬と銀と
是は後世の事
又日ト
板此市も同の
みの内ふく茶糸
よつひおとく
間のふ氏節と
うさひしもの
あうれり



物あつたる節
かうたつもの
うらうらうて
川傍
流りし毎
是と核勢
音段と祿
一都鄙
華蒼
うひ物とい
あされとも
此地の洞と
ふつ通は旅
足市都風云
服ひつりのうを
つひのそを甚推
今も舞く彩世を
玉せり



せんとして安波津之痛 ○後白河院碑 此の二代の僧侶神惠湖の

北畠顕家卿碑 此卿は津國妻那郡中ノ我死を今ノ傍あり築城あり ○築城上野

入道自修の軍中日記勅制軍法と云書あり 明寺蹟を編し今ノ傍あり

鐘 後深草帝の御宇常盤女實氏入乃寄附之毎日酉刻子刻

撞之 天正年中外宮神宮方より米塚の古法を以て鐘を造りしと云僧等

書中逐披刃を以て田種を以て後寺神宮編めく自若く申す所は

乃た鐘一つを以て申す所は申す所は申す所は申す所は申す所は

十月八日

本乃吉 朱印

上部紙中も後

東照山青雲院 妙見町と同の所の浄土宗下馬下系あり世に御装換寺と

經ヶ峯 尾郡坂右 則上よ云世義寺三宝院兩院の如法經と此所に納むる

名付る松樹一株あり南尾に曼陀羅石あり梵字多し鴉里其傍小

石にありて皆老り若し希難一近世の地といふこと 二後金剛殿の

古市場 尾郡坂の 是より宇治領昔の市場ありて縣圖の地を茶屋とい

大五輪 古市ありける方に尾郡より頂を以て余餘澄明らるる此石は古布

貝吹山 尾郡坂の九ひ布筋の良之 武元天皇の御宇に於て古布筋の良之





かや堂

たきり
 丸りのみよ芭蕉塚あり

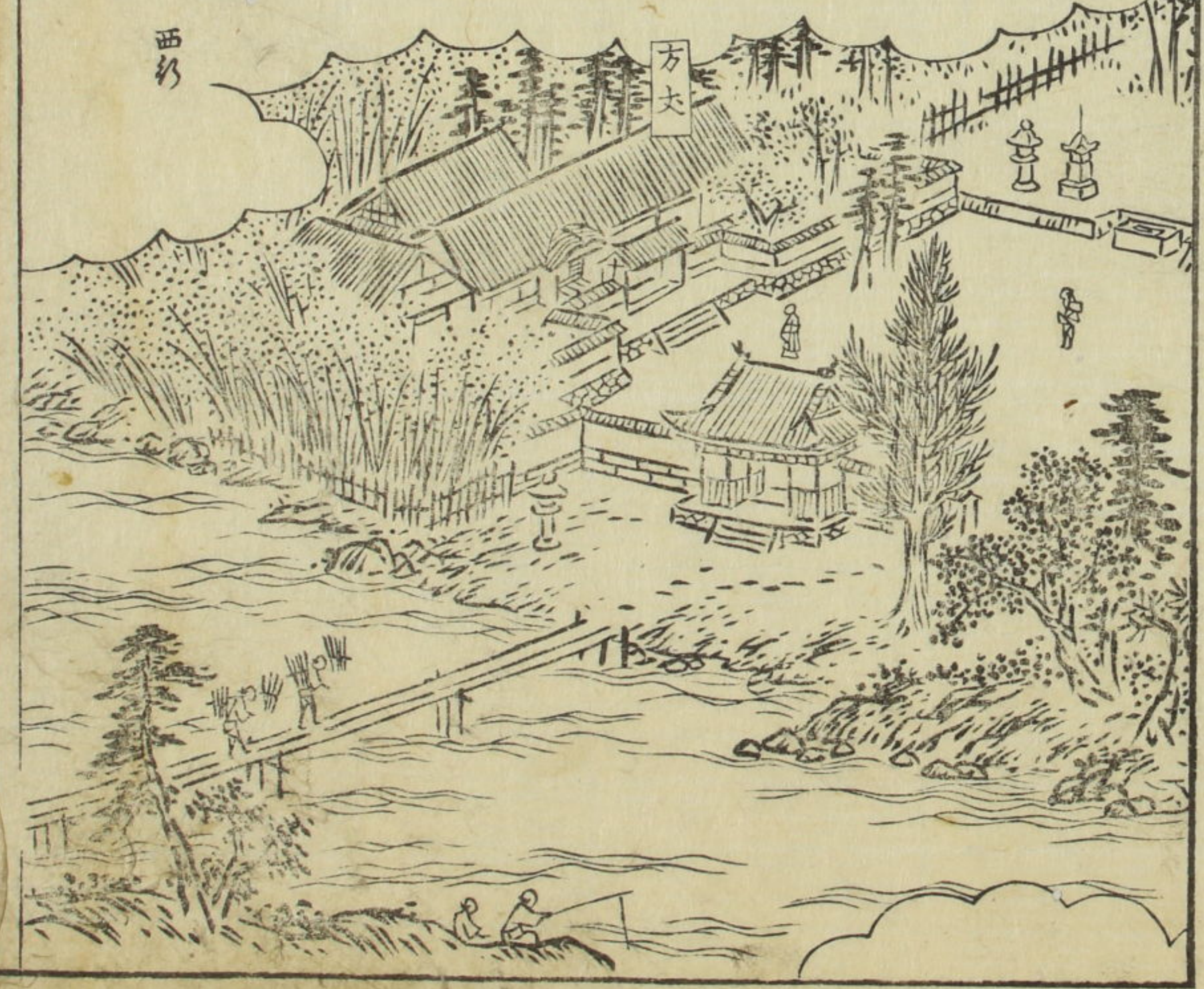
山でうた

こころ
 撫つげ

菩提山
 神宮寺

板正佛系清記云 朝暮の巡礼の志ありて
 ほとけをみるに 神宮の形を
 かくるに 住居の形を 振やうと
 民廬の垣かけたる 住居の形を
 鄙よいかに 香炉の形を 弘く寺
 浄場茶室 桐幽 菩提山 禪坊
 かくる寺を 一足してと云 下界

山家集別本 住持あり 菩提山上人月 一対
 述懐せし
 月よりわく雲舟のよそなうねも
 月よりわく雲舟のよそなうねも
 月よりわく雲舟のよそなうねも



西行

中地藏 古来の次 間長峯との内宮の外宮を八十町の其中間廿二町目之

在る中の地蔵といふ堂前長命水といふあり

葛籠石 中地蔵所東方二町斗あり 高さ八尺余横二丈斗石なりてはらけ形

に似たり今の河連を引て小社と此傍に観音あり是を大岩の觀

音といふも極多く嘆く騷客遊宴の地とす

王孫池 古市より船橋の間にありてはらけ形ありてはらけ形ありてはらけ形あり

名は下中村皇女(森) 赤子池 不傳未詳

仁壽二年八月廿二日洪水二

宮も流して今の中村の地も後せり近宮の年月いまだしも延喜

式も載るなり今の地 上右に又十餘川に流し北水の掛瀬麻海村との淵(神)ありて

一面の川ありて捕部川の中右ありてはらけ形あり

善提山 神宮寺 下中村にありて天平十六年の草創用基

紀基(サ)文治元年良仁と人これの中奥と 西の集集と善提山上人よりと

本寺の六阿弥陀佛 仍基 ○西殿立 不動毘 ○徳守 天、天法宮 ○二王

門 二王弘法 右に大伽藍の地とて金堂大師堂多宝塔経房とて弘長

年中火災と焼失と其後宝曆十年朝熊岳尊隆阿闍梨これ再

建して善子隆範に附属と ○大六佛像 續日本紀北七云孫德天皇天平神護

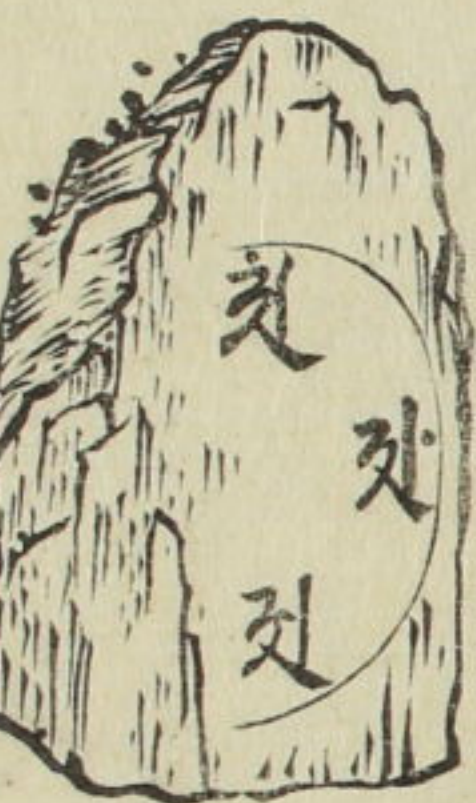
修勢出神(寺) 遺方とありて刻あり ○舍利 聖武天皇舍利を神宮に納ると

阿弥陀院 良仁上人退隱の地と云ふなり ○私板 阿闍梨の名字あり

曼陀羅石 大日二年空海刻とあり 四寸四方 堅の上下に缺破せり

奥の谷あり

曼陀羅石古瓦



幅三尺長五尺計 甚多し西面は 鑿む其内心經を 細字に刻するハ 國の如く多し 曼陀羅石古瓦

幅三尺長五尺計

諸佛依般若波羅密多故 是大神咒是大明咒是無 般若波羅密多咒即說咒 誦般若心經一卷 四書寫之御所近邊 承安四年 月六日

承安四年八月十八日 代高倉院の御 宇より御所と 書したるハ林 宮のなり

皇女(森) 日本紀雄略天皇第二皇女携幡皇女

西の上方ありてをいふ

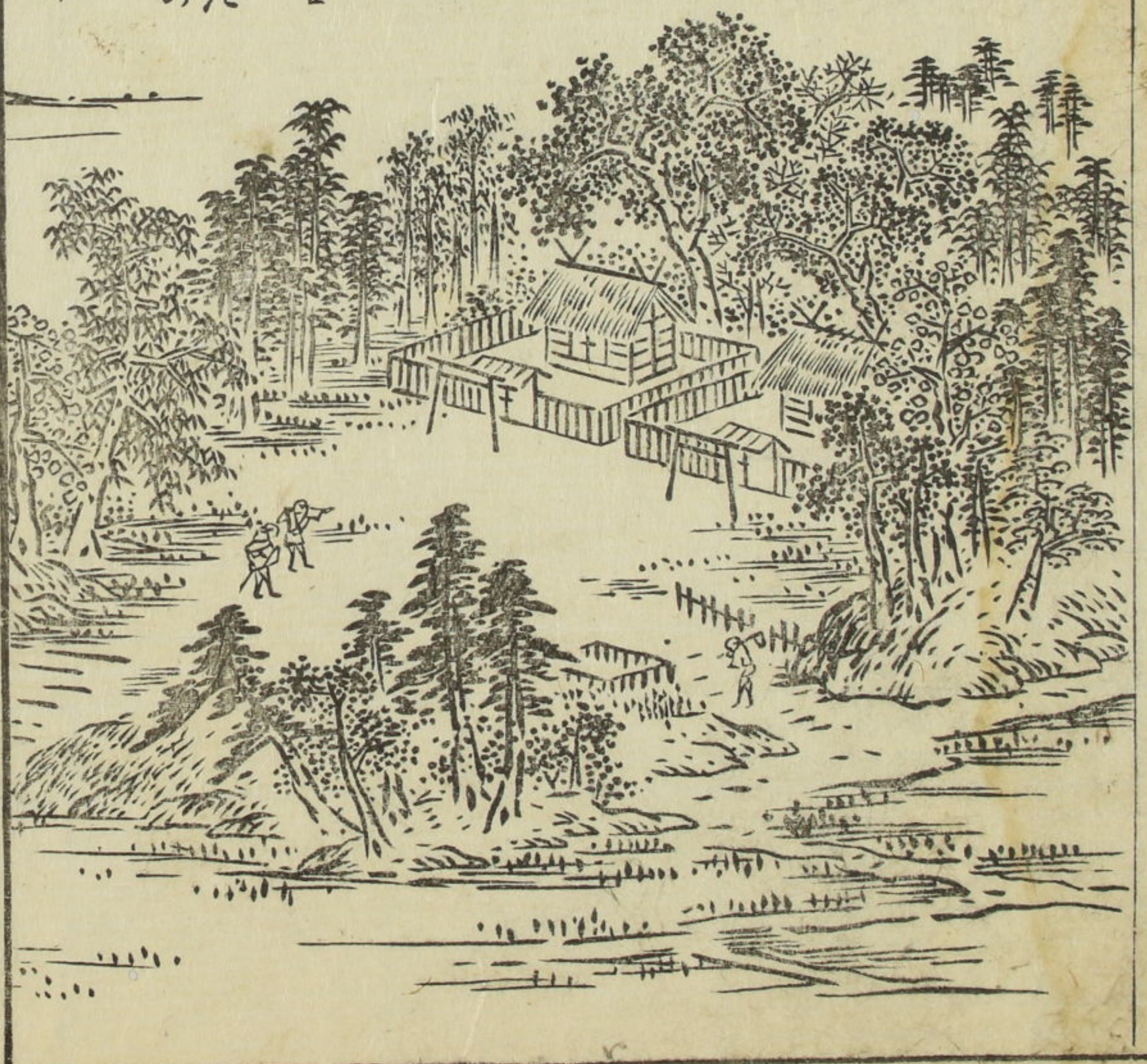
月護伊弉諾社

私安百首 實清朝臣

いとあはれ
まじり乃
鏡如
あはれ
月よ

今
阿まほくふ月日
九条内大臣

とていざうた
の
よはあま



興王社のありを後回
たふくこれ伊勢國の
たふく世俗又伊勢や
日向の物よりとる
と此神傳の時
とるめ
其義や文あり



楠部村

大土御祖社
國津御祖社

御常世田

又月吉日をもちひ大御田の御あり長官の
家司のまま政所のままこれの御あり御先と云
糸後山内人苗を極妙とてよりくお削て極妙
皆長官の御ありと云三又斗ちる御田御あり
左右十人斗ちる御ありたれを御あり御あり
又管つゝを御ありと云と其の御ありと云
ええと云ええと云と云と云と云と云と云と云
を御ありと云と云と云と云と云と云と云と云
又酒をたまへこれを御ありと云と云と云と云
後水と云と云と云

後水
やま



西行谷
神照寺

西行物語云西行
一名園位後も稱
院の御侍小面召
せりて九条東御
宣旨とらひて空
月射の人の名法
とせりて西の山
間より大津宮に
清で海を渡る
押二見の浦の月をこそ見る神よ
波うるとは 神治らば 橋の神の
にも勝つるれいなるの三身なり
あまのつねとてのまは 終るの
の辺は建久九年二月十日 宣旨とらひて
を 海を渡るの月をこそ見る



俗傳云西行の妻をより若
忍て此菴よりしりし一夜の
うらたれ我像を造りて
香粧してて 殿を法と妻の
室に娶とせしめて終り
任果て今も尼僧と傳へ
神照寺に像の祀なり
とつて後又尼の像と
副て安座と

かくの傳りつるれいなる西行
物語よりいへば妻のむら
とともなる神天母と尼
とつて 後をとも
うら娘もいふ法を分
月射の神のま
即それ法今



稱して寺号を稱せどえり山田西川原町よみて天正甲寅其後と他

の寺院と遠く佛堂種社の数多く禪家なれども本寺河内と云ふ

かゝる由縁を尋て此宗衣をききて官家の息女代に任職し終る用山

の大功を奉る不違因縁也 庫裏表裏殿廣くしてよけり 女也天社 寺の南

園田 中乃きれの方より橋あり新橋と云ふ ○那自賣社 園田の九りの方にありて

園田の神と云ふ多神二座之水と河祖命 沖玉河堂須藤比女命並其る

西の谷神照寺 宇治の西条の 建之の以園位一人暫寓居ありし云々又西の

自他陀造りとも云像あり 西の谷の扁額慶長は之今い文人詩歌集會の

席と云 今の宮殿馬九大納言光慶公の御家跡と 谷の戸み獨りぞ松の三枝かり我のこ友りかたけうと云々

○餓鬼谷直 津院南隣あり此神代文姓とも僧密法よ委しく奇異の姿ありく

法樂會 園田の神の方より後宮多院勅額として建立三百身の今いぬなり本寺より

不動堂 日石の 明王院 とも云言字にて本寺不動明王 庫裡客殿は王正十

津長社 細村の西の傍より石原座 ○大水社 津長社の南にあり一社大山抵河祖令則

鼓岳 大橋の西より宮川又十餘川の川に横とて 鼓岳の堂あり依てつゝたけと俗傳と稱と

鼓岳山蓮其寺 蓮其寺村又 一条院の御宇承教三位の建立すく其言宗也

鼓岳山長明寺 鼓岳と稱 本寺の心親善勝長明暫く此寺に住と

林修文庫 鼓岳の東の尾崎 真言宗に多し造立ありて公より兼金を持ちし志ある

寺持合して造立せらる初め林修の南の方丸と云ふ石に立たり

此石は昔寺の古地ありて又十餘川の西より鼓岳の麓に在りしなり其言宗也

今い廢して散らりし小山の山を以て其言宗を安んぜり昔には又西興ありしと云ふ十餘川と宮

川と左右の海色の中も堂ありとも其言宗あり此寺の南に在りしなり其言宗也

八百餘年あり及たり

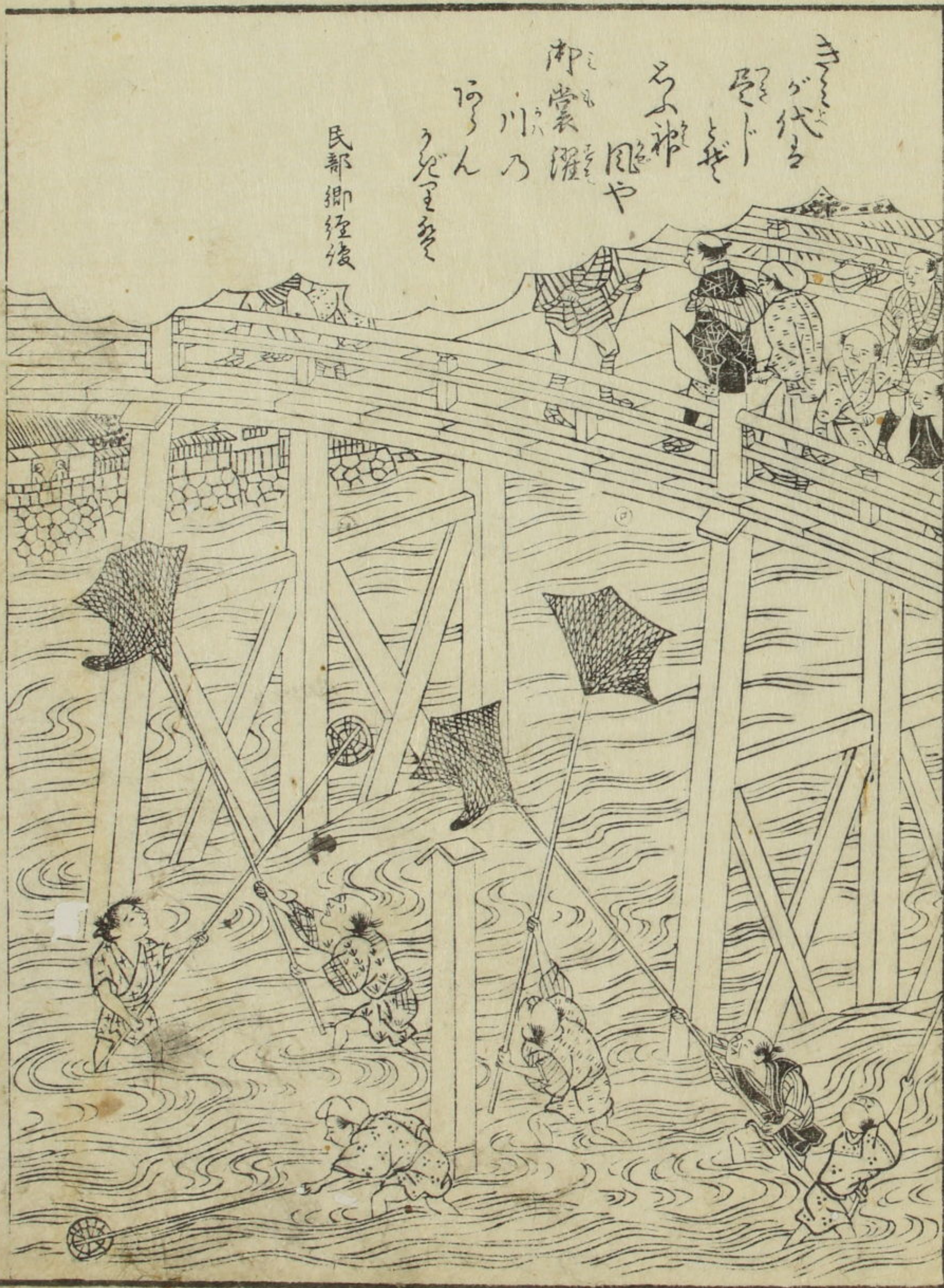
此石は昔寺の古地ありて又十餘川の西より鼓岳の麓に在りしなり其言宗也



蓮光院
 不動堂
 法泉舎
 大津社
 津長社

林寄文庫

書籍法家の寄附
 若干を納む候に石碑
 あり孝経一節を鐫む
 東武源鱗の書に石に
 表石にて奥の石と
 を奉りてこれを建てり



三ツ代
御裳
川乃
氏
民部御経後



宇治橋
五十鈴川
御裳
前中納言
匡房
君が代
又十鈴の
川
流
流
流

鏡石

其間名を多し其父
又妻

國をめぐりて一毛も
沙す其外奇蹟遠近
又奇なり其の群集異
なり其の法象も緑
深く多き岩として飛瀑
と云其八自ら松柏
茂りて其の幽邃も
何れに非ず其間又
姑射の山へ入りて

此の山路きつう遠く
淵然淵西終度極は
なれば名あり又山路
極すうの深み六所
よりて左の山は又



これ龍が岩
切木が岩と
瓶て志の
村邑あり
此辺神贄の
漁人あり



所名

橋姫社 宇治橋の守神 不系一座 宇治比賣命と云 宇治日橋姫の社を八所
 宇治橋宇治の川に又十鈴川也 普通橋より及びて後
 三、 常勢神を曰う
 一此橋は是より十余町下流の中村曾波河原にありて板橋の形なり
 永享二年 普賢院の軍義教公御系宮の時今の如く大橋を架け
 其曾波河原の中村真玉森の南に其系宮の二棟あり是と宇治橋及び橋姫
 社の間敷くは俗に十口又其系宮の川を又又斗の壺を掲げしり
 其系宮の流の形ありしと云 樓より是橋の人像あり 是系宮の壺也
 五十鈴川 宇治川より此川二流ありて二流は志及磯部村の辺の谷に
 一流は宇治川の谷又志及より流る末に中村楠部麻海村より二流
 の海に流る 今南より流るを志及と云 志及川より流るを又斗の壺と云
 鏡石 水よりあり 高式大横五斗の大小あり 谷川の方より西面を
 清淨明白 誠之磨ける鏡の如く ありて鏡石の社新川社並
 て二社あり 是の社の池に今も社あり 鏡石の池に石を置り 是の雲谷の水
 なるよりと云 老人の傳りきり 又もと云 川の川より大石巖より 其の中と流る

川かられ其鏡石の阿比石の三ツ石のゴバ石のそのライ岩 燈臺松の釜山川にあり 鏡石も其
 中のあり 鏡石の基盤岩の如く 奇大石の上よりして石面自然に其基盤の異あり
 又十鈴川の川より神石と云 抽ありしは此宇治の谷に中明海の流るをわたりしと
 歎く 荒本田氏の長史 他歎くも其異あり



二寸許大小さまぐぬ
つゞきもまを石なり
厚八分なり



四寸許



四ノ四十九

